

リベラルアーツのすすめ

日本的経営の本質とは何か

元日経連常務理事 成瀬健生氏

6月24日のアフター5は、「日本的経営の源流と発展—日本を元気にするために—」というテーマだった。講師は、元日経連常務理事の成瀬健生さん。かつて「新時代の日本的経営」という日経連報告書の作成に携わって年功賃金の見直しと雇用構造の再検討、雇用ポートフォリオの導入などを提案した



その後、この報告書を契機に多くの企業が、職能資格制度を導入したり、年功的定期昇給制度の見直しをしたりすることになった。

その結果、雇用の流動化や成果主義型賃金の普及が加速したといわれている。

だが、当日の成瀬さんの話は、そのような20年前の日本的経営や雇用ポートフォリオの推移を振り返る話ではなく、もっと根源的な話だった。これまでの日本社会の歩みや日本人が大切にしてきた価値観とか哲学についてだった。戦後の日本経済が成功したのは、人間中心の経営であり長期的視点に立った労使関係だったという。

そして、労使の考えの根底には、縄文時代に形成された日本文化があり、日本人のメンタリティがあるとも指摘した。この話は、まさしく日本的経営の本質が何か、を考える手がかりとして興味深かった。自分たちの社会、自分たちの文化とは何かを考えたいというので日本的経営を語るべきだというのだ。

だから、我々は、歴史や民族、科学や心理学など広範な分野の知識を学ぶことが必要だという。それがあってこそ日本人は、グローバル人材になる。いま企業経営者や従業員に求められているのは、この発想と教養力なのである。成瀬節は、そう結んで話を終えた。

そうか、それで、この日のレジュメが、「管理監督者のためのリベラルアーツ」となっているのだと納得した次第である。(夏目孝吉)